

百人一首のおぼえかた

	上の句		下の句		おぼえかた
うかりける	ひとをはつせの	やまおろしよ	はげしかれとは	いのらぬものを	うかれている ハゲ
ももしきや	ふるきのきばの	しのぶにも	なほあまりある	むかしなりけり	ももひき なお余りある？
おくやまに	もみぢふみわけ	なくしかの	こゑきくときぞ	あきはかなしき	奥山君の 声を聞く
きりぎりす	なくやしもよの	さむしろに	ころもかたしき	ひとりかもねむ	きりぎりすの 衣は、固い
あはぢしま	かよふちどりの	なくこゑに	いくよねざめぬ	すまのせきもり	淡路島に 行くよ
あしびきの	やまどりののを	しだりをの	ながながしよを	ひとりかもねむ	足が 長々しい
かささぎの	わたせるはしに	おくしもの	しろきをみれば	よぞふけにける	傘が 白い
こぬひとを	まつほのうらの	ゆふなぎに	やくやもしほの	みもこがれつつ	来ぬ人を 焼く
ながらへば	またこのごろや	しのばれむ	うしとみしよぞ	いまはこひしき	長良川に 牛がいる
なげきつつ	ひとりぬるよの	あくるまは	いかにひさしき	ものとかはしる	なげきの イカ
ゆらのとを	わたるふなびと	かちをたえ	ゆくへもしらぬ	こひのみちかな	ゆらちゃんが ゆく
めぐりあいて	みしやそれとも	わかぬまに	くもがくれにし	よはのつきかな	めぐりあいて 雲かくれる
おもいわび	さてもいのちは	あるものを	うきにたへぬは	なみだなりけり	重い 浮き
さびしさに	やどをたちいでて	ながむれば	いづこもおなじ	あきのゆふぐれ	さびしい 伊豆
をぐらやま	みねのもみぢば	こころあらば	いまひとたびの	みゆきまたなむ	おぐら みゆきちゃん
あらざらむ	このよのほかの	おもひでに	いまひとたびの	あふこともがな	あらざ あふこちゃん
たまのをよ	たえなばたえね	ながらへば	しのぶることの	よわりもぞする	玉野 しのぶちゃん
あまのはら	ふりさけみれば	かすがる	みかさのやまに	いでしつきかも	天野 ミカちゃん
たごのうらに	うちいでてみれば	しろたへの	ふじのたかねに	ゆきはふりつつ	田子ノ浦 富士子ちゃん
おほえやま	いくののみちの	とほければ	まだふみもみず	あまのはしだて	大江 まだふみ君
あらしふく	みむろのやまの	もみぢばは	たつたのかわの	にしきなりけり	嵐の 龍(たつ)
あはれとも	いふべきひとは	おもほえで	みのいたづらに	なりぬべきかな	あわれな いたずら
すみのえの	きしによるなみ	よるさへや	ゆめのかよひぢ	ひとめよくらむ	酢の 夢
しのぶれど	いろにいでけり	わがこひは	ものやおもふと	ひとのとふまで	忍ぶ 者
たちわかれ	いなばのやまの	みねにおふる	まつとしきかば	いまかへりこむ	立ち別れる 松と
あきのたの	かりほのいほの	とまをあらみ	わがころもでは	つゆにぬれつつ	秋の 露にぬれつつ

なげけとて	つきやはものを	おもはする	かこちがほなる	わがなみだかな	嘆け 過去
ながからむ	こころもしらず	くろかみの	みだれてけさは	ものをこそおもへ	長からん 乱れてけ
ふくからに	あきのくさきの	しをるれば	むべやまかぜを	あらしといふらむ	吹く 山風
やまざとは	ふゆぞさびしさ	まさりける	ひとめもくさも	かれぬとおもへば	山ざとは 一目見たい
かぜそよぐ	ならのをがはの	ゆふぐれは	みそぎぞなつの	しるしなりける	風そよぐ みそ
せをはやみ	いはにせかるる	たきがはの	われてもすゑに	あはむとぞおもふ	せが 割れる
ひとはいさ	こころもしらず	ふるさとは	はなぞむかしの	かににほひける	人は 花ぞ
しらつゆに	かぜのふきしく	あきののは	つらぬきとめぬ	たまぞちりける	白露を つらぬく
むらさめの	つゆもまだひぬ	まきのはに	きりたちのぼる	あきのゆふぐれ	村の 霧
あきかぜに	たなびくもの	たえまより	もれいづるつきの	かげのさやけさ	秋かぜが もれる
はるすぎて	なつきにけらし	しろたへの	ころもほすてふ	あまのかぐやま	春過ぎて 衣ほす
わすれじの	ゆくすゑまでは	かたければ	けふをかぎりの	いのちとまがな	忘れじ けふを
あひみての	のちのこころに	くらぶれば	むかしはものを	おもはざりけり	愛は 昔
たきのおとは	たえてひさしく	なりぬれど	なこそながれて	なほきこえけれ	滝の 名こそ流れる
みせばやな	をじまのあまの	そでだにも	ぬれにぞぬれし	いろはかはらず	店 濡れる
これやこの	ゆくもかへるも	わかれては	しるもしらぬも	あふさかのせき	これや 知る？
ほととぎす	なきつるかたを	ながむれば	ただありあけの	つきぞのこれる	ほととぎすは ただ(無料)
みよしのの	やまのあきかぜ	さよふけて	ふるさとさむく	ころもうつなり	見よ ふるさと
こころにも	あらでうきよに	ながらへば	こひしかるべき	よはのつきかな	心に 小石
こころあてに	をらばやをらむ	はつしもの	おきまどはせる	しらぎくのはな	心当てに置き
はなさそふ	あらしのにはの	ゆきならで	ふりゆくものは	わがみなりけり	花誘う ふり
みかのはら	わきてながるる	いづみがは	いつみきとてか	こひしかるらむ	ミカの いつ？
なつのよは	まだよひながら	あけぬるを	くものいづこに	つきやどるらむ	夏の 雲の
はなのいろは	うつりにけりな	いたづらに	わがみよにふる	ながめせしまに	花の わが身よ
ひとをし	ひともうらめし	あぢきなく	よをおもふゆゑに	ものおもふみは	人も よを思う
このたびは	ぬさもとりあへず	たむけやま	もみぢのにしき	かみのまにまに	この もみぢ
たかさごの	をのへのさくら	さきにけり	とやまのかすみ	たたずもあらなむ	高砂の 戸
あけぬれば	くるるものとは	しりながら	なほうらめしき	あさぼらけかな	開けぬ！ なお恨めしい

あまつかぜ	くものかよひぢ	ふきとぢよ	をとめのすがた	しばしとどめむ	あまつ風 を止める
わがいほは	みやこのたつみ	しかぞすむ	よをうちやまと	ひとはいふなり	わがいほは 宇治山
なにはえの	あしのかりねの	ひとよゆゑ	みをつくしてや	こひわたるべき	難波江の 身を尽くした恋
いにしへの	ならのみやこの	やへざくら	けふここのへに	にほひぬるかな	いにしへの けふここ
よをこめて	とりのそらねは	はかるとも	よにあふさかの	せきはゆるさじ	よをこめても 関は許さん
みちのくの	しのぶもぢずり	たれゆゑに	みだれそめにし	われならなくに	道が 乱れ、われ泣く
ありあけの	つれなくみえし	わかれより	あかつきばかり	うきものはなし	ありあけの あかつき
やまがわに	かぜのかけたる	しがらみは	ながれもあへぬ	もみぢなりけり	山がわに 流れる
ひさかたの	ひかりのどけき	はるのひに	しづごころなく	はなのちるらむ	久方の 静心
やへむぐら	しげれるやどの	さびしきに	ひとこそみえね	あきはきにけり	八重？ 人こそ三重ね
いまこむと	いひしばかりに	ながつきの	ありあけのつきを	まちいでつるかな	今来む ありあけ
はるのよの	ゆめばかりなる	たまくらに	かひなくたたむ	なこそおしけれ	春の かい
よのなかは	つねにもがもな	なぎさこぐ	あまのをぶねの	つなでかなしも	よのなかは あまの
つきみれば	ちぢにもものこそ	かなしけれ	わがみひとつの	あきにはあらねど	月見る わが身ひとつ
ちぎりきな	かたみにそでを	しほりつつ	すゑのまつやま	なみこさじとは	ちぎりきな すえのまつ
きみがため	をしからざりし	いのちさへ	ながくもがなと	おもひけるかも	きみがためを ながく
きみがため	はるののにいでて	わかなつむ	わがころもでに	ゆきはふりつつ	きみがため はる ゆきは ふる
ちはやぶる	かみよもきかず	たつたがは	からくれなゐに	みづくるとは	ちはやぶる からくれない
わびぬれば	いまはたおなじ	なにはなる	みをつくしても	あはむとぞおもふ	わびぬれば みをつくしても あはむ
ちぎりおきし	させもがつゆを	いのちにて	あはれことしの	あきもいぬめり	ちぎりおきし あはれ
こひすてふ	わがなはまだき	たちにけり	ひとしれずこそ	おもひそめしか	こいするちようは ひとしれ ず
わすらるる	みをばおもはず	ちかひてし	ひとのいのちの	をしもあるかな	わすられる ひとのいのち
わたのはら	やそしまかけて	こぎいでぬと	ひとにはつげよ	あまのつりぶね	やそしまさんに つげよ
わたのはら	こぎいでてみれば	ひさかたの	くもゐにまがふ	おきつしらなみ	こぎいでてみたら しらなみ
あさぼらけ	ありあけのつきと	みるまでに	よしののさとに	ふれるしらゆき	ありあけの月が よしののさ とに

あさぼらけ	うちのかはぎり	たえだえに	あらはれわたる	せぜのあじろぎ	うじの川が あらわれる
おほけなく	うきよのたみに	おほふかな	わがたつそまに	すみぞめのそで	大きなク ワガタ
みかきもり	ゑじのたくひの	よるはもえて	ひるはきえつつ	ものをこそおもへ	ミカ気も 屋は消え
あふことの	たえてしなくば	なかなか	ひとをもみをも	うらみざらまし	会う事 人を
なにしおはば	あふさかやまの	さねかずら	ひとにしられで	くるよしもがな	何塩 人に知られ
いまはただ	おもひたえなむ	とばかりを	ひとつてならで	いふよしもがな	今は 人づてなら
なにはがた	みじかきあしの	ふしのまも	あはでこのよを	すぐしてよとや	難波方 泡で
かくとだに	えやはいぶきの	さしもぐさ	さもしらじな	もゆるおもひを	書くと 刺し
うらみわび	ほさぬそでだに	あるものを	こひにくちなむ	なこそをしけれ	恨み 恋に朽ちる
たれをかも	しるひとにせむ	たかさごの	まつもむかしの	ともならなくに	誰を 待つも昔
もろともに	あはれとおもへ	やまざくら	はなよりほかに	しるひともなし	もろ友に 花よ
おとにきく	たかしのはまの	あだなみは	かけじやそでの	ぬれもこそすれ	音に聞く 賭け
つくばねの	みねよりおつる	みなのがは	こひぞつもりて	ふちとなりぬる	つくばねの 恋ぞ積もる
よのなかよ	みちこそなけれ	おもひいる	やまのおくにも	しかぞなくなる	世の中よ 山の奥も
かぜをいたみ	いはうつなみの	おのれのみ	くだけてものを	おもふころかな	風を くだく
ありまやま	ゐなのささはら	かぜふけば	いでそよひとを	わすれやはする	有馬は いーで
あさぢふの	をののしのはら	しのぶれど	あまりてなどか	ひとのこひしき	朝、十の 余り
よもすがら	ものおもふころは	あけやらで	ねやのひまさへ	つれなかりけり	よも(用も) ねーや
わがそでは	しほひにみえぬ	おきのいしの	ひとこそしらね	かわくまもなし	わが袖は 人こそ知らねえ
やすらはで	ねなましものを	さよふけて	かたぶくまでの	つきをみしかな	やすらは 傾く
ゆふされば	かどたのいなば	おとづれて	あしのまろやに	あきかぜぞふく	夕の 足